

# A STUDY OF FUSANARI NAGAOKA'S KATA IN THE EARLY 19TH CENTURY

Jun-ichi KATO (Saitama Institute of Technology)

## CONTENTS

1. Introductory remarks.
2. In regard to "Tohoroku-Seihou-hen."
3. Fusanari's views of Seihou.
4. Concluding remarks.

## SUMMARYS

The Nagaoka had been connected with the Yagyū since early 17th century. In the early part of the 19th century, Fusanari Nagaoka was assiduous in embarking on the rehabilitation of Shinkage-yagyū-ryū, and he constructed the "Shiai-seihou." This "Shiai-seihou" is one of the "Kata," it includes about 200 "Tachi." The aim of this rehabilitation was to give persons to understand what is the real "Kata."

## TECHNICAL TERMS

KATA	TOHOROKU-SEIHOU-HEN
SEIHOU	SHIAI-SEIHOU TACHI

## 長岡房成の勢法観について

——『刀金録・教習篇』に見られる教習課程を中心に——

加 藤 純 一  
(埼玉工業大学)

### 緒 言

今日の新陰柳生流の教習体系は、そのおよそ半分が所謂「試合勢法」といわれる、長岡房成が考案した勢法（かた）にあたる。この長岡房成を生み出した長岡家とは、柳生家と如何なる関係にあったのであろうか。

そもそも長岡家は、代々兵法補佐家として柳生家に仕えている。その兵法補佐役の初代は長岡房英（生没年月不詳）で、新陰柳生流第10世柳生厳備の高弟にあたり第11世柳生厳春に仕えている。また、長岡家の菩提寺である政秀寺の過去帳を紐解くと、柳生家との関係は古くは柳生利厳の時代から続いていることが判明する。当の長岡房成（ながおかふさしげ：1764—1849）はというと、『柳生流兵法と道統』<sup>1)</sup>によれば、文化9年（1812）柳生厳久が若くして新陰柳生流第14世を継承した時に、兵法補佐役として後見したと記されている。そして柳生厳春同様、新陰柳生流の中興に努めたことでもその名は知られている。

さて、今回新陰柳生流第21世を継承されている柳生延春氏のご協力で、長岡房成が著した兵法書『刀金録・教習篇』を見る機会に恵まれた。この書は、新陰柳生流の教習に関する房成の私見が記されているものであり、新陰柳生流の勢法を語る上では非常に貴重な資料と言える。本稿ではこの資料を基に、新陰柳生流の勢法となった試合勢法と古来相伝の勢法の関係を明確にし、さらに房成の勢法観を考察することで、兵法補佐家としての長岡房成の兵法活動の一部を明らかにしようと試みた。

### 長岡房成と『刀金録・教習篇』

長岡房成が試合勢法を考案し、それを新陰柳生流の教習の中に取り入れたことで、従来の教習課程に代わる新たな体系が確立された。ここでは試

合勢法考案後の新陰柳生流の教習課程について、既に拙稿で取り上げた『刀金録・勢法篇』<sup>2)</sup>（以下『勢法篇』）並びに今回の『刀金録・教習篇』を基に考察を進めていくことにする。それに際して『刀金録・教習篇』について若干の説明を施しておくことにする。

『刀金録・教習篇』（以下『教習篇』）は『刀金録』四篇（第一が『本篇』、第三・四が『勢法篇』）のうちの第二篇にあたり、その名の通り新陰柳生流の教習に関することが書き記されている。縦17センチ、横21センチ、和紙を綴じたもので「新陰流兵法外伝刀金録教習篇二」と記されている。その内容は、前半に稽古をするにあたっての技術的な教えとその心構えの詳解、後半に新陰柳生流の教習課程について述べられている。とくに後半の部分では、房成自らの体験を踏まえ教習課程はいかにあるべきかが記されている。

さて、房成の時期の教習課程について述べる前に、房成自身はどのような教習課程を踏まえて勢法を学習してきたのであろうか。『教習篇』には「教序次」として、何歳にして何を学習したかが記されている。それをまとめると次のようになる。

年齢	内 容	稽古年数
13	入 学	1
15	大 転	3
18	小 転	6
21	天狗抄	9
24	奪刀法	12
27	授 書	15
30	打合者（撃介者法）	18
33	免 許	21
36	印 可	24

これからすると、房成は寛政11年（1799）柳生厳春（当時58歳）から印可を授けられていることがわかる。

さて、房成自身の学習経緯により、房成以前の大まかな教習の流れは把握できた。そこでもう少し詳細に教習課程を眺めていくことにする。房成は「古法」と「家法」という言葉を使い、試合勢法考案前のものと、それ以後のものとを比較しながら教習課程の在り方について述べている。それ

らをまとめると、次のようになる。

順序	古 法	家 法
第 1	三学、九箇の高揚勢 燕飛	大転／表木打ち／六四勢法／三 学、九箇の高揚勢
第 2	大転／大転の間斫	大転の間斫
第 3	三学、九箇の小下勢／小転／ 小転の間斫	転変の下段七勢、雷刀六勢／小 転の間斫／三学、九箇の小下勢
第 4	天狗抄（七勢）	天狗抄（七勢）／外伝（相雷刀 形中断而迎～雷刀打撓草順止）
第 5	天狗抄（一勢）／奪刀法	天狗抄（一勢）／奪刀法／外伝 （両刀雷刀、雷刀破両刀円曲）
第 6	太刀目録、古書の伝授	本原篇伝授／外伝（撃両敵右旋 勢、向槍深檐勢、四平高勢）／ 六四勢法（相雷刀合迎順）／外 伝（小転下段変雷刀）
第 7		外伝（向偃月刀勢、打欲奪刀勢、 闇夜之勢、木刀勢、撃介者勢）
第 8	截相書、始終不捨書上巻	同上
第 9	没茲味手段書、始終不捨書下 巻、奥義太刀	同上
第10		増補神妙剣

この「古法」と「家法」を比較すると、試合勢法がいかなる目的をもって考案されたかがよくわかる。すなわち、巖包考案の「高揚勢」は、従来の「三学」「九箇」を円滑に教習できるようにと考案した分解動作を基軸とするものであるが、房成はその導入に入るための導入として、「大転」<sup>39</sup>や第一勢法の一部の太刀を取り入れ、さらには「表木打ち」<sup>40</sup>のような一人稽古をも奨励している。したがって、これらの勢法はあくまでも古来相伝の勢法の補助的な役割といった色彩が濃いといえよう。

一方、第二勢法の両刀雷刀のような勢法は、「右三勢法伝奪刀法而後許也（右三勢法は奪刀法を伝えて後に許す也）」とあるように、古来相伝の勢法の導入としてではなく、一つの確立された勢法としての色彩を持つも

のである。このような勢法は特に第二勢法に多く見られ、なかには「門外不出」と朱書きされている場合もある。しかし、房成は「古伝皆在此中也（古伝は皆此中に在り）」と述べていることから、古来相伝の勢法とは独立した形を取りながらも、上泉秀綱以来の斬り合いのエッセンスはこれらの勢法のなかに全て包括されていると考えられる。

### 長岡房成の勢法観

次に房成の勢法観について見てみよう。房成は『教習篇』の巻頭で、勢法は身体の修練や刀法を修めるのに役立つとして、次のようなことを述べている。

先習之以勢法能熟之以間截試合而令得其權變神速勢法者拳擊刺之法而使人習之以練其身体弁其利害者也故知勝負之形勢修刀路之自然熟大小緩急之打明越附合之三節弁眼法触刃境權機奇正變化虛實心位者也

（先勢法を以て之を習い、能く間截試合を以て之を熟して、其の權變神速を得さしむ。勢法は擊刺之法を挙げて、人に之を習わせ、以て其の身体を練らせ、其の利害を弁えさすもの也。故に勝負の形勢を知り刀路の自然を修め、大小緩急の打ちを熟し、越す附く合つすの三節を明らめ、眼法、触刃境、權機、奇正、變化、虛實、心位を弁えるもの也。）

この文章の前半においては、相手の機に応じて自分も即座に対応し、かつ技が自発的に発せられるようになるために身体を練り、善きも悪きも身体で弁えられるように勢法を通して修練せよと述べている。また後半では、勝負の形勢の認知、刀路の修養、大小緩急の打の習熟、越・付・合の三節（三拍子）の明解、眼法・触刃境・奇正・變化・虛實・心位の分別を説いている。そして、房成は次のように結んでいる。

古来相伝之燕飛円太刀九箇太刀転天狗抄奥義太刀之類又予内外之勢法等是也故所以勝之形而非所以制勝之形正是此道之筌蹄而先授初学習法之第一具也。

（古来相伝の燕飛、円太刀、九箇太刀、転、天狗抄、奥義太刀の類、又予の内外の勢法等是也。故に勝の形の所以にて勝の形を制する所以には非らず。正に是れ此の道の筌蹄にて、先初学に習法の第一具を授ける也。）

前述の勝負の形勢や刀路、あるいは拍子といったものは、新陰柳生流の勢

法のなかに全て含まれており、この勢法を修養していけば、自然と勝ちの形を弁えることができるとしているのである。

### 試合勢法の意義（おわりにかえて）

長岡房成が著した一連の兵法書は、いつ頃から執筆されるようになったのであろうか。公開された資料が少ないため、詳細なことはわからないが、『刀金録』が寛政13年から執筆され、そのうちの「巻の一」は文政12年に書き終えていること、また『新陰柳生流兵法口伝書外伝四』<sup>5)</sup>は天保9年に完成していることから、次のようなことが推測できる。

- ①長岡房成が柳生厳春から印可を受けたのが寛政11年であることから、それ以後に執筆活動に入った可能性が高い。
- ②『新陰流兵法外伝書』と『刀金録』の執筆は同時進行していた可能性が高い。
- ③『刀金録』の「巻之二」である『教習篇』に試合勢法の太刀名が記されていることから、『刀法試合篇』<sup>6)</sup>はそれ以前に、「巻之三」、「巻之四」の『勢法篇』はそれ以降に執筆された。

また、房成が厳久の兵法師範役に着任したのが文化9年であることから、一連の兵法書は若冠にして柳生の道統を継承した、厳久に宛ててのものであった可能性もある。

さて、房成の勢法観について言及するならば、その勢法観が集約されている試合勢法には、対峙の場に必要とされる切り合いの本質の全てが包括され、かつそれが合理的に集約されていると解してよからう。つまり、その勢法を繰り返し繰り返し稽古することによって、先哲の教えを自然と体得し、勝負の形を習得することができるのである。しかしその反面、一に泥むことを嫌い、二百数十本もある「かた」を考案していることも事実である。そして、

試合者彼我共試合其所得也故人々任意闘而弁勝負之特質者也。此練権道者也。

（試合は彼我共に其の得る所を試し合う也。故に人々は任意に闘いて勝負の得失を弁える者也。此れ権道を練る者也。）

と述べるこの言葉にこそ、房成の勢法に対する本心が表れており、また試合勢法と命名した所以がここにあると考えられる。いくら先達の教えで、切り合いの本質を「かた」として具現化したとしても、拘泥してしまえば

それまでである。一つの「かた」においても、振りの緩急や拍子を変えればそれこそ千変万化する。互いが真の切り合いを希求して臨む、これが長岡房成の言わんとする試合勢法なのであらうと筆者は考える。

最後に、末筆ながら大変貴重な資料を御提示下さいました柳生延春氏に深甚の謝意を表し、おわりの言葉としたい。

——註ならびに引用文献——

- 1) 碧榕館。65～66頁。1925年。
- 2) 拙稿『尾張藩新陰柳生流の勢法について』（『日本武道学研究』、島津書房、204～228頁、1988年）で、『刀金録・勢法篇』の分析を行った。
- 3) 柳生巖包がやはり考案した、古来相伝の「転」を簡易にしたものを言う。尚、この時点をもって従来「転」を「小転」と称するようになる。これは察するに、元々の「転」は短い小太刀を用いていたのに対して、巖包は大太刀で同様の「形」を行わせたことに起因するものと考えられる。
- 4) 地面に藁を巻き付けた木を立て、それを打ち込む稽古方法を言う。
- 5) 柳生延春氏所蔵。長岡房成は、一連の『刀金録』の他に『新陰流兵法外伝』を認めている。この『新陰流兵法口伝書外伝四』もその一つに当る。
- 6) この『新陰流勢法外伝・刀法試合篇』も、先の『新陰流兵法口伝書外伝四』同様、『新陰流兵法外伝』の一シリーズに当る。